



日本学術振興会バンコク研究連絡センター

活動報告(2011 年 10 月～12 月)

バンコクの風 ลมจากกรุงเทพฯ



サワディーピーマイカップ。

明けましておめでとうございます。昨年中は大変お世話になりました。本年もよろしくお願いいたします。早いものであつという間に 2012 年となりました。着任が 2010 年ですので年越しも 2 度目。この間、大洪水に見舞われたかと思えば、次は在タイ米大使館により近辺でのテロへの注意喚起が発せられるという、得がたい時間を過ごしております。(1 月 20 日現在、容疑者一名逮捕済み)

この四半期、タイ国内の地方都市を複数訪ね、海外ではバングラデシュ・ミャンマー・シンガポールを短期間のうちに歴訪させていただきました。その違いは極めて鮮烈で、一口に「アジア」と呼ぶことの危うさを改めて思いしらされた心地です。

さて、第 4 四半期はいよいよ事務所の移転・JASSO との共用が待ったなしとなりました。皆様の叱咤激励を胸に励みたいと思います。

■ タイ国内大学表敬訪問 6 チェンマイ大学 ■

2011 年 10 月 11 日（火）、当センターメンバー全員でチェンマイ大学（Chiang Mai University）を表敬訪問しました。これは、当センターの 2011 年度（4 月から翌年 3 月まで）計画の一つで、タイ国内で 9 つ認定されている研究型国立大学を表敬し、事業紹介をしようという一環です。これまでにバンコク市内のカセサート大学、チュラロンコン大学、タマサート大学、キングモンクット工科大学、マヒドン大学を訪問しており、これで 6 大学目です。



左から当センタータイ人スタッフ、副センター長、センター長、
Prof. Wipada 副学長、Assist. Prof. Nat 副学長

チェンマイ大学は、古都でありタイ第 2 の都市であるチェンマイに 1964 年の創設されたトップ校の一つで、タイ北部の教育・研究・医療の拠点となっている大学です。現在では 60 以上の研修コース、3 つの学部課程、23 の修士以上課程の国際コースを開いており、国際的なプレゼンスを高めることにも力を注いでいます。

今回は、教育担当副学長（Vice President for Academic and Educational Quality Affairs）である **Prof. Wipada Kunaviktikul** と研究担当副学長（Vice President for Research and Academic Services）である **Assist. Prof. Nat Vorayos** にお会いすることができました。Prof. Wipada 副学長は過去に JSPS 事業で日本医科大学に短期滞在された経験があり、Assist. Prof. Nat 副学長は過去に当センターを訪問され、池島前センター長とお会いしたことがあるということです。

センター長による事業紹介の後、副学長からは大学全体の Ph.D. の保持率が 59%であることや、現在も 6 名が JSPS 事業でのサポートを受けていることなどが紹介されました。



iPad2 を用いての事業紹介

チェンマイ大学としては、JSPS の拠点型事業をとりに行くにあたって、たとえば拠点大学交流事業など歴史的なつながりを持っていないため人的なつながりが豊富でなく、そういったケースに対する助言を求められました。当センターとしては、JSPS 事業にかかわらず日本の大学との現行の共同研究を発展させることや、タイで実施中の JSPS 課題ではカバーされていない分野を見出すことなどをお応えしました。

現在、チェンマイ大学では香川大学と 2 年に一度研

究集会を開催しているほか、三重大学とは中国の大学との3国間協力を行っているということです。特に遠隔医療（telemedicine）に焦点を絞っていくことを考えており、そういった分野でのファンド獲得に期待が持たれます。

また、若手研究者対象のJSPS事業紹介セミナーの開催については非常に前向きでおられ、1月下旬から2月初頭にかけての開催に向けて、今後、調整を行っていくこととなりました。

<http://jsps-th.org/?p=1869>

■ USMCAでのポスターセッションに参加 ■

2011年10月12日（水）、チェンマイ市内 Empress Hotel にて開催の 10th International Symposium on New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia (USMCA)に参加し、当センターのポスターセッションを行いました。

USMCA はアジア大都市の都市安全を目的として科学技術の利用・普及を目指す研究シンポジウムで、2002年から毎年アジアの各都市で開催され多くの参加者を集めています。今年は洪水での法人救護・災害対応で急きょ欠席となった在タイ日本大使に代わり、在チェンマイ日本国総領事が開会式での挨拶を述べられ、延べ200



盛況だったポスターセッション

人近い参加者がありました。センター長の出向元である東京大学生産技術研究所の都市基盤安全工学国際研究センター（ICUS : International Center for Urban Safety Engineering）が中心となって運営しております。

アジア工科大学（AIT）に所属する研究者を中心にタイ以外のアジア各国からも参加者が多く、JSPS事業での支援による日本での研究や日本との共同研究に対しては非常に高い関心があります。若手研究者の育成事業やアジアでの事業展開を中心に多くの質問が寄せられ、手ごたえのあるポスター発表となりました。

当センターでは今後とも折々の機会を利用した事業紹介を行っていく予定です。

<http://jsps-th.org/?p=1813>

■ JSPS-NRCT セミナーを開催 ■

2011年10月15日（土）、バンコク市内 Siam City Hotel, Bangkok にて JSPS-NRCT セミナー「Study and research opportunities in Japan and perspective of Thailand by Japanese social scientists（日本への留学・研究機会の紹介と日本の社会学者から見たタイの将来展望）」を開催しました。タイ国

内の学術研究機関に勤務する研究者など、総勢 90 名以上が参加し、熱心な意見交換が行われました。

このセミナーには 2 つの側面があり、ひとつは今年度中をメドとする当センターと JASSO（日本学生支援機構）タイ事務所とのオフィス共用化をきっかけとした事業の共用と、タイ国内で手薄にも感じられる社会科学の奨励です。

このため、セッションを午前と午後の 2 つに分け、午前中は JSPS と JASSO によるアジアでの学術・留学振興への取組みの紹介とタイ国内にオフィスを持つ日本の大学のポスターセッションとし、午後は日本から招いた社会科学分野の研究者によるタイ社会の将来展望についての講演会としました。

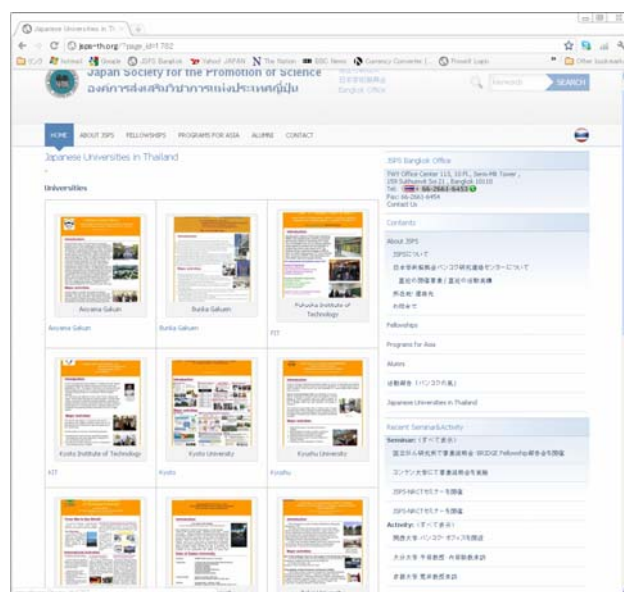


参加者全員での記念撮影

特にポスターセッションについては、タイ国内にある 14 大学 17 オフィスの協力を得て統一様式のポスターを作成していただきました。これにより、参加者への大学紹介のほか、活動内容や連絡先について大学間でシェアが行われ、今後の大学間協力や大学の独自色のある取り組みが期待されます。ポスターは以下のページからダウンロードすることができます。

http://jpsps-th.org/?page_id=1782

午後の研究講演会では、センター長の所属元である東京大学から 2 名、副センター長の所属元である京都大学から 2 名の研究者にお越しいただき、災害軽減、少数民族、資源政策、国内政治と、それぞれの研究について興味深い講演を行っていただきました。参加者からは質問やコメントが相次ぎ、主催者としては痛しかゆしの思いであるものの、それと同時に、タイ国内での「社会」そのものに対する関心の高さや学術的な分析への飢えのようなものを感じた次第です。



当センターのウェブサイト



目黒教授



片岡准教授



佐藤准教授



玉田教授

Disaster Mitigation Systems Considering Local Availability, Applicability and Acceptability

東京大学生産技術研究所 目黒公郎 教授

公助、共助、自助といった災害時の支援の考え方や、既存の建築物に対する比較的な簡単な耐震補強工事の方法など、タイにも適用可能な災害軽減策を写真や映像を用いて紹介されました。

Religion and Culture of the Ethnic Minorities in Thailand

京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科 片岡樹 准教授

中国・タイ・ビルマ国境域の山岳民族ラフ族に関する長年の研究を紹介されました。宗教や文化のほか、移動の歴史が説明され、タイをはじめ東南アジアの複雑な民族構成の一端が伺い知れました。

Resource Politics in State-Society Relations: Comparing Thailand and Japan

東京大学東方文化研究所 佐藤仁 准教授

森林や鉱石資源政策、それに関連する労働力政策について、タイと日本を対照させながら、その特徴・違いを明らかにされました。

Political Stability in Thailand

京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科 玉田芳史 教授

タイ政治の不安定さについて、タイ独特の民主制に根拠をおきながら詳説されました。全編タイ語の講演にはタイ人参加者から極めて積極的な質問が投げかけられ、白熱した議論が展開されました。

その後、ホテル内の中華レストラン Lin-fa にて、NRCT 主催の夕食会が開かれました。NRCT 事務局長の **Prof. Dr. Soottiporn Chittmittraparp** をはじめとした NRCT 職員、JSPS 本部より参加の**星野有希枝**地域交流課長および**須川真衣**課員、講演いただいた研究者の方々および当センターメンバーで食事をしながらの懇談では、目下タイ全土で起きている洪水と今夏の日本での洪水について意見が交わされるなどしました。

当センターでは今後とも NRCT との強い連携を維持しながら日・タイ間の学術交流の懸け橋となっていきたいと思います。<http://jsps-th.org/?p=1581>

■ 大分大学山岡教授 来訪 ■

2011 年 10 月 17 日（月）、大分大学より山岡吉生 教授が当センターを来訪されました。山岡教授の来訪はこれで 2 度目、大分大学からのお客様はこれで 4 度目となり、当センターでの情報収集がお役に立っているものと嬉しく理解しております。

今回は翌日からのミャンマー出張に向け、バンコク市内でビザ申請をされた後のご訪問となりました。前回のご訪問時には、ミャンマーでの調査が結果的にはうまく運ばなかった旨を話されており、慎重に手続き等を踏まれた結果、晴れて

ミャンマーでの調査が可能となったとのことで、粘り強い取り組みの様子をうかがい知ることができました。いずれまた今回の調査のお話を伺うことができればと思います。



左からセンター長と山岡教授

なお、大分大学医学部では、現在チュラロンコン大学医学部との連携・協力体制を堅持され、そのネットワークを用いて研究活動を続けておられます。今回、当センターからは、首都チュラロンコンに次いで、地方での連携拠点を設けられてはいかがかと提案させていただきました。

これはタイ国内での学間連携の促進と同時に、ノロウィルスの変遷を追うことで人類の歩みを探るという、大分大学が実施しているプロジェクトの目的にもかなうものとの理解によるものです。チェンマイは北部の主要都市であり、中国やミャンマー国境の山岳民族への「窓口」ともいえるため、学術的に面白いデータが得られるのではないのでしょうか。また、先日のチェンマイ出張の経験から、医学系の研究に関してはチェンマイ大学との協力・連携の可能性が考えられることをお伝えしました。

山岡教授は検討してみるとのお考えを残し、ミャンマーへ旅立たれました。当センターとしては、引き続き日・タイ間のより緊密な連携に貢献していきたいと考えております。

<http://jsps-th.org/?p=1913>

■ JICA タイ事務所を表敬訪問 柿原理研シンガポール事務所長に同行 ■

2011 年 10 月 18 日（火）、理化学研究所シンガポール事務所 柿原健一郎 所長に同行して、JICA タイ事務所を表敬訪問しました。

今回の柿原所長の来タイは、タイにおける研究能力の底上げを目的とした日本人研究者の長期派遣について、制度設計の可能性を探ることを目的としておられます。具体的には、日本人研究者が長期的にタイに滞在し、研究だけではなく、タイ人学生や若手研究者を教育する仕組みを設けるための方策で、タイ人が日本へ行って研究能力を上げることに比べて、数の観点で非常に効率が高くなります。



左から田中章久 JICA バンコク事務所次長、副センター長、柿原所長、米田所長、センター長、三好企画調査員

学生が一定の学位を修めるまでの

5 年程度は滞在する必要があるが、現役の日本人研究者が 5 年の長期にわたってタイで教職に就くことは困難である、という課題を乗り越える必要があり、そのために考えたのは、日本で定年退職後もまだまだ能力と意欲のある研究者を派遣する、ということでした。

JSPS と JICA の間では科学技術研究員派遣事業を実施しており、研究者の派遣という点ではすでに枠組みがあります。しかしながら、これは 65 歳未満の研究者を最長 2 年間派遣するもので、この 2 点の克服を目指した議論を、JICA タイ事務所 米田一弘 所長と行いました。

柿原所長の提案に対して、途上国支援を旨とする JICA の米田所長もその意義に理解を示され、検討の結果、科学技術担当の三好克哉 企画調査員を通じて本部に打診を行うことを約束されました。

JICA 本部での検討結果が待たれます。<http://jpsps-th.org/?p=1916>

■ JSPS 安西理事長を表敬訪問 ■

2011 年 10 月 27 日（木）、センター長および副センター長が JSPS 東京本部を訪問し、安西祐一郎 理事長に表敬のご挨拶をいたしました。

これは、先般から続くタイでの洪水がバンコクに至り、10 月 29・30 日の大潮を控えて、中心部への浸水の可能性とそれに備えた 4 日間の公休化の首相声明が出されたことに伴って、副センター長の一時帰国を決めたことによるものです（センター長は日本への出張中）。

JSPS 本部ではまず、国際事業部の加藤久部長に帰国の挨拶をし、田淵エルガ参事および満井祥子研究協



左からセンター長、安西理事長、副センター長

力第一課センター係長にバンコクの状況報告と一時国に関する説明を行いました。この席ではこのほかに、今年度中をめどとする JASSO タイ事務所との事務所共用化の進捗について協議しました。東京とバンコクでなかなか顔を合わせる機会がないなか、直接に話をする場が得られたことは不幸中の幸いです。

この後、理事長室に通され、10月に就任されたばかりの安西祐一郎 理事長に対し改めて状況報告をしたほか、東南アジアにおける科学技術・学術動向について、センター業務を通じて得られた所感等をお話いたしました。

安西理事長からはねぎらいの言葉をいただいたほか、東南アジア地域の重要性を強く念押しされ、帰国後の業務に向けて改めて身を引き締めた次第です。

この後、センター長の派遣元である東京大学生産技術研究所を視察し、最寄りに勤務されている**角田亜紀子** 前副センター長にご挨拶に伺いました。

副センター長としては避難のための一時帰国とはいえ、非常に充実した秋の一日を過ごすことができました。一年を切った残りの任期に向け、望外の充電期間となりました。

<http://jsps-th.org/?p=1920>

■ 千葉大学山崎教授一行 来訪 ■

2011年11月7日（月）、千葉大学工学研究科より**山崎文雄** 教授、**丸山喜久** 准教授、産業技術総合研究所より**松岡昌志** 地質調査情報センター地質・衛星情報統合室室長が当センターを来訪されました。

現在バンコクでも被害の広がりを見せている洪水の現地調査ということです。救命胴衣や長靴を持参され、バンコクの北部パトゥンタニにあるナワナコン工業団地や、チャオプラヤ川西岸地域などを視察されたということです。都市の安全工学がご専門とはいえ、この時期にこの場所で水に濡れることも覚悟の研究意欲には頭が下がる思いです。

また、山崎教授は JICA-JST の枠組みである SATREPS（地球規模課題対応国際科学技術協力）でも「ペルーにおける地震・津波減災技術の向上に関する研究」を主宰しておられ、この中でもリモート・センシングを用いた地震被害予測が行われるなど、センター長の研究分野への造詣・関心も高くなります。

なお、山崎教授と丸山准教授は、副センター長が京都大学で勤務していた際に担当していた研究プロジェクトに参加しておられ、直接ではないものの何度も連絡を取り合っていたことがわかりました。



左から丸山准教授、山崎教授、センター長、松岡室長

不思議なご縁を感じた次第です。

当センターでは今後とも研究と研究、人と人とを結びつける、縁の下の仕事に努めていく所存です。

<http://jsps-th.org/?p=1925>

■ タイ国内大学表敬訪問 7 コンケン大学 ■

2011 年 11 月 8 日（火）、当センターメンバー全員でコンケン大学（Khon Kaen）を表敬訪問にしました。当センターの 2011 年度（4 月から翌年 3 月まで）計画の一つで、タイ国内で 9 つ認定されている研究型国立大学を表敬し、事業紹介をしようという一環です。これまでにバンコク市内のカセサート大学、チュラロンコン大学、タマサート大学、キングモンクット工科大学、マヒドン大学のほか、地方ではチェンマイ大学を訪問しており、これで 7 大学目です。



JSPS についてもよくご存じの Prof. Dr. Suthipun 副学長

コンケン大学は 1964 年にタイ東北部（イサーン地方）で最初に設立され、現在では 18 部局に 3 万人の学部学生、1.2 万人の大学院生、2,000 人の教員を抱えるという、タイ国内でも有数の規模を誇る大学です。タイ国内でも特に貧しい地域といわれる東北部における一大教育・研究機関といえることができるでしょう。現在、JSPS のアジア研究教育拠点事業とアジア・アフリカ学術基盤形成事業でも、それぞれ一課題が選定されています。

研究・技術移転担当副学長（Vice President for Research and Technology Transferring）である **Prof. Dr. Suthipun Jitpimolmard** にお話を伺ったところ、特に、医療、健康、食糧、エネルギー、天然資源、環境、物流、教育、先端技術、社会科学といった分野で 25 の研究施設と 30 の研究グループを形成しており、研究型大学への移行を進めている状況とのことです。今後は段階的に学生数を絞っていきながら、より研究重視の体制を作っていくとのこと。

前回のチェンマイ大学訪問の際もそうですが、バンコクと地方都市とでは大学の役割・位置づけが多少異なることが感じられます。多くの大学が林立するバンコクでは、大学間での役割分担が成立し、一つの大学は得意分野に絞った戦略で存在感を高めることができます。一方で、地方都市においては、チェンマイやコンケンといった拠点となる大学では求められる分野・役割が広く、その分特色を出しづらくなっている現状です。タイ国内でも大学間の競争は激しく、今後は ASEAN 域内での競争にもさらされることとなります。地方の各大学の危機感は非常に高まっていることがうかがえます。

コンケン周辺では近年、私立大学が設立されてきており、現在進めている研究型大学への移行は地

域におけるそういったバランスをみながらの果敢であるものと理解されました。



仏教大学の皆さんと

なお、今回のコンケン大学表敬訪問は、事業説明会の実施と合わせて、JSPS タイ同窓会（JAFT）のメンバーでもある **Assoc. Prof. Dr. Sukanya Aimimtham** コンケン大学人文社会学部計画・情報担当副学部長（Associate Dean for Planning and Information, Faculty of Humanities and Social Sciences）に全面的にコーディネートしていただきました。副学長表敬のほかに、Dr. Sukanaya 自身が臨時講師を務めているという僧侶専用の公立仏教大学 Mahachulalongkornrajavidyalaya University のコンケンキャンパスを訪問させていただき、飛び入りで「日本講座」を行いました。当大学には国際コースや修士課程、さらに博士課程もあり、お坊さんたちの日本への関心は非常に高く、出される質問にはうならされることもしばしばでした。

タイ全土のお寺の中でも一、二を争う美しさといわれるワット・ノンウェン（Wat Nong Wan）にも案内いただき、9層構造の最上部から市内を望むことができました。美しい湖を囲むように造成された一等地の新興住宅地はバンコクからの投機的な買いにより値段が上昇し、地元の人の購入は難しくなっているということです。

当センターとしては、特に優遇等ができるわけではありませんが、首都外の大学のあり方を念頭に置いていきたいと思います。 <http://jsps-th.org/?p=1945>

■ コンケン大学にて事業説明会を実施 ■

2011年11月8日（火）及び9日（水）、コンケン大学及び同大学人文社会学部にてJSPS事業説明会を実施し、若手研究者を中心に2日間で約100名の参加がありました（8日80名、9日20名）。

これは、コンケン大学教員でタイ JSPS 同窓会 (JAFT) メンバーでもある **Assoc. Prof. Dr. Sukanya Aimimtham** 人文社会学部計画・情報担当副学部長 (Associate Dean for Planning and Information, Faculty of Humanities and Social Sciences) に、6 月 15 日にカセサート大学で実施した JSPS 事業説明会兼 BRIDGE Fellowship 報告会に講演者として参加していただいたほか、10 月 15 日に開催した JSPS-NRCT セミナー「Study and research opportunities in Japan and perspective of Thailand by Japanese social scientists (日本への留学・研究機会の紹介と日本の社会学者から見たタイの将来展望)」にもご参加いただいたことで話がまとまり、実現したものです。



左から Dr. Kittisak、Dr. Sukanya、センター長、Prof. Dr. Suthipun 副学長、医学部 Dr. Bawornsini Chaochuen、Dr. Sineenat Siri



“骨太” のお二人

Suthipun Jitpimolmard より開催の挨拶をいただいたほか、理学部助教である **Dr. Sineenat Siri** に司会進行を務めていただきました。

今回の説明会で特徴的だったことは、**Dr. Sykanya** と **Dr. Kittisak** とともに論博事業の手続きや日本での体験談を話されると同時に、研究をしていくための心構えや姿勢といったものに多く言及されていた点です。日本では教授が出勤するよりも前に研究室に入っておくこと、長期的な目標をしっかりと掲げながらも今現在の取組みにこそ全力を注ぐこと、といった研究者としての覚悟が語られました。

質疑応答では、事業応募にあたって自分に適した研究者を JSPS に紹介してほしい、という発言が

11 月 8 日、JSPS の事業説明に加え、JSPS 事業経験者の体験談等を披露することで若手研究者の意欲を高めることを目的に、ともにコンケン大学教員で JAFT メンバーでもあり、過去、論文博士号取得希望者に対する支援事業により日本で学位を取得された **Dr. Sukanya** と **Dr. Kittisak Sawanyawisuth** 医学部准教授にご参加、ご講演いただきました。

コンケン大学からは研究・技術移転担当副学長 (Vice President for Research and Technology Transferring) である **Prof. Dr.**

出たところ（どの会場でも同様の要望が出されます）、JSPS 側が答える前に、自分に適した研究者・自分を受入れてくれる研究者を見つけコンタクトを取ること自体が応募プロセスの一環、引いては研究そのもの一部であるという回答が講演者側から出され、これには発言した側も納得せざるを得ない様子でした。

翌 11 月 9 日は Dr. Sukanya が所属する人文社会学部で同様の説明会を行い、研究教育担当副学部長（Research affairs and academic Services）である **Dr. Maneemai Thongyou** にご挨拶をいただきました。

ここでの参加者は博士課程学生が多く、直接の応募には結びつかないものの熱心な様子で説明に聞き入り、質問も多く出されました。同学部では外国語教育にも

熱心で、日本語やスペイン語といった諸外国語講座の開設もさることながら、英語の発音がとてもきれいなことが印象的です。

バンコクでは多くの場合、タイ語母語者独特のイントネーションがありますが、ここではネイティブ教員の出身国であるアメリカ風の流暢な英語が聞かれ、ここにも首都と地方都市との環境の違いが表れているのか、それはハングリー精神でもあるのか、といったこと考え次第です。

当センターでは今後とも、バンコク外の大学訪問も積極的に続けていきたいと思っています。

<http://jsps-th.org/?p=1953>



人文社会学部の参加者たちと

■ バングラデシュ出張 バングラデシュ同窓会シンポジウムについて打合せ ■

2011 年 11 月 14（月）日から 16 日（水）まで、センター長及び副センター長がバングラデシュへ出張しました。バングラデシュ出張は昨年 12 月に続いてこれで 2 度目。今回の目的は、来年 2 月に開催予定のバングラデシュ JSPS 同窓会（BJSPSAA: Bangladesh JSPS Alumni Association）の第 3 回科学シンポジウム（仮）に向けた打合せです。



喧噪のダッカ市内

バングラデシュにおける JSPS 同窓会活動については、従来 JSPS 東京本部が直接に関与・管轄しておりましたが、同窓会業務を担当する里見昭彦 人物交流課長と当センター長の間で話し合いが持たれ、今年 9 月以降、当センターが間に入ってコーディネートすることが決定されました。これに伴い、毎年開催される BJSPSAA シンポジウムについても、その運営部分を当センターが担当することになった次第です。

11 月 14 日、BJSPSAA 理事メンバーとの打合せを夕方に控え、研究者国際交流センター（JSPS Fellow Plaza）の福井育夫 主任及び小島昌夫 現地コーディネーターとともに、在バングラデシュ日本大使館に大村浩 一等書記官を訪ねました。大村書記官は BJSPSAA の立上げ以来、大変にご尽力いただいている方で、今回のシンポジウム開催についても種々のご協力を賜っています。

BJSPSAA としては、シンポジウムの日本側主賓としてノーベル賞受賞者を要望していますが、これは日程の調整等の関係で非常に難しい課題です。そこで、大村書記官の働きかけにより木村孟 文部科学省顧問、元大学評価・学位授与機構理事長、元東京工業大学学長の出席への同意が取れたことを説明いただきました。このほか、来年が日本-バングラデシュ国交樹立 40 周年に当たることから、今回のシンポジウムもその関連行事の一つとして開催したい旨の説明をいただきました。

その後、ダッカ市内 BRAC Center を訪れ、BJSPSAA 理事との打ち合わせに臨みました。

BJSPSAA からは Dr. Imamul Huq 筆頭副会長（Senior Vice President）、Prof. M. Tofazzal Islam 事務局長（General Secretary）のほか 7 名の理事が参加し、シンポジウムのテーマ、日程、会場、ゲスト、参加者、予算といった内容について議論が交わされました。



前列左よりセンター長、Prof. M. Tofazzal Islam 事務局長、Dr. Imamul Huq 筆頭副会長、福井主任、大村一等書記官。後列中央が小島コーディネーター。

ここでの決定は概要以下の通りです。

- ・テーマ：Science for Society
- ・開催日：2 月 24 日（金）25 日（土）
- ・会場：バングラデシュ国立博物館オーディトリウム
- ・主賓：（日本）木村孟文部科学省顧問、（バングラデシュ）未定
- ・参加者：300 人、事前登録の実施
- ・講演者：日本より 2 名。BJSPSAA にて候補者リストを作成し、JSPS バンコクにて照会。

- ・小島コーディネーターには引き続き現地コーディネーターにご協力いただく。

翌日、会場となるバングラデシュ国立博物館を訪れ、講堂の設備等を確認し、レセプション会場の候補地として挙げられたレストランを視察しました。両会場とも問題がないことが確認され、シンポジウム開催に向けて大まかな概要が決定したことになります。

今後、2月24日の開催に向けて詳細部分の詰めの作業を行っていきたいと思います。

<http://jsps-th.org/?p=1968>



結果的に使用できなくなった博物館

■ ミャンマー出張 ICSE2011 にて事業紹介 ■

2011年11月30日(水)から12月3日(土)まで、センター長および副センター長がミャンマーに出張しました。目的は、ヤンゴン市内セドナホテルで12月1-2日に開催されるICSE 2011 (The 3rd International Conference on Science and Technology)に参加し、JSPSの事業紹介を行うことです。

ICSEは2009年よりミャンマーの科学技術省(MOST: Ministry of Science and Technology)が開催しており、ミャンマー全土及び海外からも主に工学関係の研究者を招へいして行われる国際シンポジウムです。ミャンマーにおいてはほぼ唯一と言っていい国際的な科学研究集会で今回が3回目となります。

ミャンマーのほか、中国、オーストラリア、シンガポール、ドイツ、アメリカ、マレーシア、イスラエル、タイ、アラブ首長国連邦、日本の10カ国から約150人の研究者が参加し、分科会形式でそれぞれに研究発表を行いました。その分野は機械工学、電気、電力、電子機械、情報、物理、化学、土木、生物工学、リモート・センシング、数学の多岐にわたり、ミャンマーの科学技術動向を観察する上ではまたとない機会です。



開会式での記念撮影



センター長による事業紹介

開会式では科学技術副大臣 **H. E. Dr. Ko Ko Oo** が登壇して挨拶を述べるなど、ミャンマーが国を挙げて科学技術振興に踏み出している熱気が伝わりました。

当センター長が自身の研究発表と兼ねて JSPS 事業紹介を行ったところ持参したブローチャー300部がすべて配布されるなど、外国資金による人材育成に対する関心も非常に高いものがあります。事業紹介後には、スウェーデン王立工科大学で学位を取得され、MOST の科学技術研究部門の元長官でありスウェーデン名誉領事でもある **Dr. Myint Han** がコメントを述べられ、長期間にわたって孤立した状況にあった当国における、海外で研鑽を積む機会を得ることの重要性を確認されました。



センター長と Dr. Myint 名誉領事

なお、シンポジウム期間中、急きょ MOST 傘下の科学技術系大学の幹部職員と当センターとの会談の席が設けられました。ミャンマー側の参加者は科学技術副大臣 **H. E. Dr. Ko Ko Oo** を筆頭に、国内における工学系大学の最高峰にあたるヤンゴン工科大学及びマンダレー工科大学の両校の学長である **Prof. Dr. Mya Mya Oo**、学生数で最大を誇る西ヤンゴン工科大学の学長補 **Prof. Dr. Thingi** 及びマウビン工科大学の学長補 **Prof. Dr. Zaw Min Naing** の4名です。

会談では、ミャンマー国内の高等教育事情について概要以下のことが伝えられたほか、国内のインターネット環境をかんがみて、全世界に向けて開かれている JSPS 事業について、JSPS から直接に募集案内をもらえないか、といった要望がありました。

-全国に 170 大学あり、すべて国立大学。学費は年間 1 ドル程度。

-大学は、主に教育省 (MOE: Ministry of education) と科学技術省 (MOST) が管轄しており、後者が科技系大学を、前者がそれ以外を担当している。この他に、林業省と鉱物省がそれぞれ一つ専門の大学を持っている。

-MOST 傘下には、32 の工学系、25 のコンピューター科学、1 つの宇宙科学系の大学があり、約 10 万人の学生を抱えている。

-博士号を持つ教員の 80 パーセント以上はミャンマー国内で取得しており、大学間、教員間でのコミュニケーションは円滑である。

-特に力点を置いているのは、生物化学、ICT、工業・生産科学、宇宙科学の4分野である。

-ヤンゴン工科大学とマンダレー工科大学は大学院大学で、教員数がそれぞれ 250 と 140、学生数は 600 と 100 である。



左から Dr. Kyaw Sann Oo, 副センター長, センター長, H. E. Dr. Ko Ko Oo 副大臣, Prof. Dr. Mya Mya Oo, Prof. Dr. Thingi, Prof. Dr. Zaw Min Naing

当センターとしては、今後の連携への期待を抱きつつ、当該会談内容について JSPS 本部に委細もなく報告する旨お約束しました。

12 月 3 日はヤンゴン工科大学を訪ねて出張講義を行いました。Dr. Mya Mya Oo 学長を初めとする教員陣と話をすることで、JSPS-JICA 科学技術研究員派遣事業による研究者派遣の可能性が見出され、土木工学を中心とした工学一般分野での協力について具体的な検討を行っていく予定です。

今回の出張は、折しもアメリカのクリントン国務長官のミャンマー初訪問と時期が重なりました。当センターとしては今後も、今まさに門戸が開かれつつあるミャンマーを注視し、連携の可能性を探っていきたいと思います。<http://jsps-th.org/?p=2015>



ミャンマーのシンボル：シュエダゴン・パゴダ

■ シンガポール出張 APRSAF-18 にてアナウンス ■

2011 年 12 月 5 日（月）から 11 日（日）まで、センター長および副センター長がシンガポールに出張しました。12 月 6-9 日に Marina Mandarin Singapore ホテルにて開催の APRSAF-18（The 18th Session of the Asia-Pacific Regional Space Agency Forum）に参加し、各国から参加している宇宙開発研究機関に対し、日本発のファンドとしてアピールを行うことが目的です。

APRSAF はアジア太平洋地域宇宙機関会議と訳され、アジア太平洋地域における宇宙利用の促進を目的として 1993 年に設立されました。各国の宇宙機関や行政機関をはじめ、国連などの国際機関や民間企業、大学・研究所などが参加する、アジア太平洋地域で最大規模の宇宙関連会議です。1993 年以来 17 回の国際会合を開いており今回が 18 回目、シンガポール宇宙技術協会 (SSTA: Singapore Space and Technology Association)、シンガポール国立大学リモートセンシングセンター (CRISP: Center for Remote Imaging, Sensing and Processing, NUS: National University of Singapore)、が日本の文部科学省 (MEXT) および JAXA (宇宙航空研究開発機構) と共催しました。(MEXT、JAXA は毎年共催)



参加者による集合写真

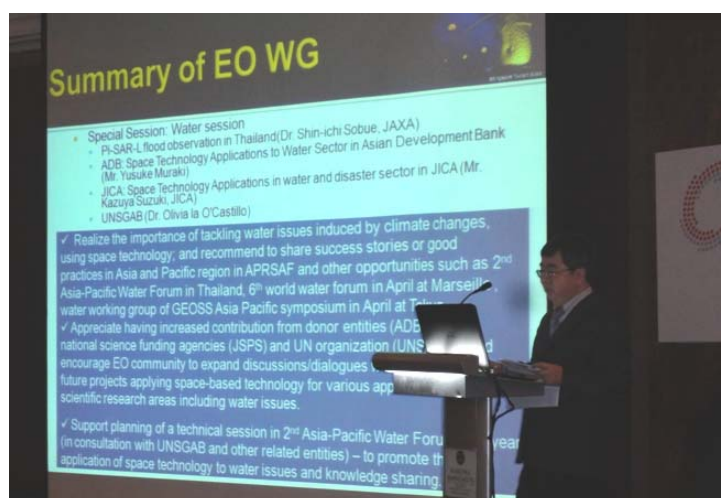
シンガポール及び日本のほか、オーストラリア (DIISR)、インド (ISRO)、カザフスタン (KAZCOSMOS)、マレーシア (ANGKASA)、韓国 (KARI)、タイ (GISTDA)、ベトナム (VAST)、アメリカ (NASA) の各国代表機関のほか、国連機関 (UNCOPUOS、UNESCAP) や ASEAN の関連部会 (ASEAN SCOSA)、国際機関 (IAF) が参加する大規模な会合となりました。

当センターがこの場で JSPS のアピールを行うには大きく分けて 2 つの理由があります。

1. 現在、JSPS の A-core (アジア研究教育拠点事業) に宇宙関連課題はなく、アジア地域において JSPS のカバーする研究領域の多様性を広げる意味で重要であること。

2. 2012 年 (平成 24 年) 度以降、アジアを専一的に対象としていた A-core が全世界対象の Core-to-Core (研究拠点形成事業) に統合される中で、宇宙関連分野は比較的競争力が高いと考えられ、全世界競合の Core-to-Core においても採択の見込みが考えられること。

2-2. この点は更に、本会議のアジア太



JSPS の名を読み上げる Mr. Kwoh 所長

平洋という枠組みを利用することで、アジアを超えた研究交流に発展する可能性も秘めていること。

そうした中で迎えた会議最終日、各分科会による Summary 報告にて、共同議長（Co-Chair）である CRISP の **Mr. Kwoh Leong Keong** 所長（Director, Center for Remote Imaging, Sensing and Processing (CRISP), National University of Singapore (NUS)）によって、今後利用可能な資金としてアジア開発銀行や国連機関とならんで、JSPS の名前が読みあげられました。

今後の申請に期待したいと思います。<http://jsps-th.org/?p=2027>

■ シンガポール出張 2 JST および理研オフィスを訪問 ■

2011 年 12 月 5 日（月）から 11 日（日）までの出張期間中、センター長および副センターで JST（Japan Science and Technology Agency 科学技術振興機構）シンガポール事務所および理化学研究所シンガポール事務所を訪問しました。

JST シンガポール事務所では、交換共有資料の補充をしたほか、**山下篤也** 所長よりシンガポール及び東南アジアにおける研究事情の説明をいただきました。たとえば、アジア各国から JSPS 事業に採択され、日本での滞在期間を終えた後にシンガポールに移られた研究者は多く、そういった方々の口コミによって、シンガポール在住またはシンガポールに訪問してくる各国研究者に対し、JSPS 事業への申請が促されているという実態があるようです。

また、シンガポールにおいては基礎研究離れが進んでおり、産業への移転や産業界とのマッチングが進められていることは以前にもお聞きしておりましたが、周辺の各国においてもその兆候があるということです。たとえば、ヴェトナムやインドネシアにおいても、JST シンガポール事務所がシンガポールで行っている、産業界を招いての研究発表会（マッチングを見込む）について、開催の引き合いがあるとのこと。

これには、国家として初等中等教育はカバーできたとしても高等教育にまで手が回らない中で、教育関係省庁にかかわって商産業・通商系の省庁により



左からセンター長と山下所長



柿原所長との打合せ

進められるという、経済的な背景があるようです。

なお、JST シンガポール事務所周辺では、すでにある Biopolis、Fusionpolis に続いて、Mediapolis の建設が計画されているということです。

次に、理化学研究所シンガポール事務所では、**柿原健一郎** 所長と東南アジア地域における科学技術動向について意見交換するとともに、2012 年 2 月 24-25 日にバングラデシュのダッカにて開催するバングラデシュ同窓会セミナーへの、同窓会側からの要請である理研所属研究者の派遣について相談しました。これについては年明け、早ければ年内にもお答えをいただける予定です。

当センターでは今後とも両シンガポール事務所を緊密な連携を取っていきたいと思います。

<http://jsps-th.org/?p=2032>

■ JASSO 金城課長来訪 ■

2011 年 12 月 13 日（火）、JASSO より**金城太一** 政策企画部総合計画課長および**岩原禎彦** 同課企画係長が**萩原隆史** タイ事務所所長とともに当センターを訪問されました。

今回のタイ出張は、今年度中を目標とする当センターと JASSO タイ事務所の事務所共用・移転についての現地視察ということです。

お話の中で、事務所共用後の事業の共用の一環として、タイ JSPS 同窓会（JAFT）メンバーの協力を仰いで、日本渡航の経験談を高校生や大学生を対象に語ってもらうといったことが提案されました。

その一つで、2012 年 3 月 10-11 日には、在タイ日本大使館およびバンコク日本商工会議所の共催で就学・就職セミナーが開催されることから、まずはそこへの参加を検討されたい旨の依頼があり、当センターとして来年 1 月 18 日（水）に開催される第 7 回理事会のなかで諮ってみることをお伝えしました。

今後とも協力体制を深めていきたいと思います。

<http://jsps-th.org/?p=2036>



左から萩原所長、岩原係長、金城課長、センター長

■ タイ大学表敬訪問 8 プリンス・オブ・ソンクラ大学 ■

2011 年 12 月 14 日（水）、当センターメンバー全員でタイ南部ハトヤイ（Hat Yai ハジャイともいう）のプリンス・オブ・ソンクラ大学（Prince of Songkla University）を表敬訪問にしました。当センタ

一の 2011 年度（4 月から翌年 3 月まで）計画の一つで、タイ国内で 9 つ認定されている研究型国立大学を表敬し、事業紹介をしようという一環です。これまでにバンコク市内のカセサート大学、チュラロンコン大学、タマサート大学、キングモンクット工科大学、マヒドン大学のほか、北部チェンマイ大学及び東北部コンケン大学を訪れており、これで 8 大学目です。

プリンス・オブ・ソンクラ大学（PSU）は 1971 年に設立された比較的若い大学で、大学病院のほかタイ南部に 5 つのキャンパスをもつ総合大学です。全 30 学部で 37,000 人の学生を抱え、このうち学部学生 31,000 人、博士課程学生が 1,000 人という、国内でも屈指の規模を誇ります。QS 国際大学ランキングでは、マヒドン大学（Mahidol University）、チュラロンコン大学（Chulalongkorn University）、チェンマイ大学（Chiang Mai University）、タマサート大学（Thammasat University）に続いて国内 5 位。



左から Assoc. Prof. Dr. Booncharoen Wongkittisuksa, Assoc. Prof. Dr. Chusak Limsakul 副学長, センター長, Assoc. Prof. Dr. Wichien Chatupote, Assistant to President for International Affairs, Asst.Prof. Dr. Ram Yamsaengsung, Assistant to President for Research and Graduate studies, Assoc. Prof. Dr. Perapong Tekasakul 室長, 副センター長, 現地職員, 古内正美 金沢大学教授

今回は研究教育担当副学長 (Vice President for Research and Graduate Studies) である **Assoc. Prof. Dr. Chusak Limsakul** をはじめとする計 5 名の PSU 幹部教員のほか、JSPS 事業により PSU と長く協力関係にある金沢大学理工研究域環境デザイン学系 古内正美 教授にも同席いただきました。

PSU の特徴として、800 床の大型の大学病院のほか、歯学部のなかに歯科病院があるなど、教育研究だけでなく、南部における医療の拠点にもなっていることがうかがえます。また、金沢大学とは、2006 年から JSPS 二国間交流事業、その後は JENESYS 東アジア首脳会議参加国からの招聘事業などで継続的に共同研究を行っていることが説明されました。

当センターから、そういった実績をベースとして AA-Platform (アジア・アフリカ学術基盤形成事業)

や Core-to-Core（研究拠点形成事業）への申請をお勧めしたところ、タイ側で用意すべきマッチングファンドについて、既存の課題がどういった資金を用意しているのか、という質問が寄せられました。

また、当センター長から若手研究者向けの事業紹介セミナーの開催を提案したところ同意が得られ、金沢大学との共同研究のカウンターパートであり、工学部准教授でもある **Assoc. Prof. Dr. Perapong Tekasakul** 研究開発オフィス室長（Director, Research and Development Office）と今後、調整を進めていくことが決まりました。

翌 12 月 15 日（木）、工学部に **Assoc. Prof. Dr. Perapong Tekasakul** を訪ね、2009 年 3 月までの金沢大学との二国間交流事業について、その事業報告を受けました。事業期間中に修士 3 名、学士 5 名を輩出したほか、国際ジャーナルに論文を 7 本掲載したことなど伝えられ、当方からは再度、この実績を土台として Core-to-Core や AA-platform 事業へ申請することを提案し、前向きな回答を得られました。



工学部にて、**Assoc. Prof. Dr. Perapong** と学生たち

続けて、理学部に助教の **Asst. Prof. Dr. Anchana Prathep** を訪ねました。2002 年から 10 年間実施された東京大学大気海洋研究の拠点大学交流事業について、その事業報告を受け、若手研究者を巻き込むことができるものとして他国のファンドと比較して高い評価を得ていることが伝えられました。

また、マングローブ林等とならんで海藻が生物多様性の評価基準となり得ることや、Blue Carbon という新しい概念について説明を受け、タイを中心とした東南アジア地域での更なる研究発展の可能性を感じることができました。



理学部にて **Asst. Prof. Dr. Anchana**（左 2 人目）と。右 2 人目の女性は 2 日間アテンドいただいた **Miss Pinchanok Komapatra** 大学国際部職員

PSU には、JSPS タイ同窓会理事で、外国人特別研究員事業で日本に滞在した **Dr. Challermkiat Songkram** がいるほか、上記のように小型・大型の交流事業参加者がいることから、来年度はじめを見

込む事業紹介セミナーでは、これまでにない多彩な事業経験談を聞くことができそうで、今から楽しみです。

当センターでは今後も大学訪問及び事業紹介セミナーを継続していく所存です。

<http://jsps-th.org/?p=2042>

■ NRCT を表敬訪問 ■

2011 年 12 月 16 日（金）、当センターメンバー全員で対応機関であるタイ国家学術評議会（National Research Council of Thailand（NRCT））を表敬訪問しました。我々の訪問は今年度 2 度目、通算で 5 度目になります。

今回の目的は 11 月 1 日に新たに国際部長（Director, Office of International Affairs）に就任された **Ms. Pimpun Pongpidjayamaad** へのご挨拶と、来年 2 月 3 日（金）に予定している論文博士号取得希望者に対する支援事業（論博）による博士号取得者へのメダル授与式へのご協力と出席の依頼です。

冒頭、Ms. Pimpun より自己紹介がありました。前職は同じく NRCT 内の経済・平和構築部

部長（Director, Economic and Peace Creation）であると同時に、NRCT の研究部門に病理学の研究スタッフ（Pan Pathologist）として 20 年以上勤務されていたということです。国際部長への就任からまだ日が浅く、目下、精力的に勉強中とのことでした。

その後、当センター長より JSPS 事業及び NRCT-JSPS 間の長年の協力関係について、特に論博や年に 2-3 回の共催セミナーの開催を中心に説明差し上げました。短い時間ながら、Asia Africa Section の課長である **Mr. Sawaeng Jongsutjaritham** の解説もはさみつつ、ご理解いただきました。

2 月 3 日（金）のメダル授与式については、NRCT からの代表者によるご挨拶など、例年通りのご協力をいただけることで合意に至り、用意したプログラム案を土台に準備を進めていくことになりました。

当センターとしては今後とも NRCT との緊密な連携をタイにおける第一義の課題として維持・強化していきたいと思います。 <http://jsps-th.org/?p=2050>



Ms. Pimpun 部長とセンター長

■ 大学への批判 世界銀行

世界銀行は、タイをはじめ東アジアの高等教育は労働市場および経済そのものに対してもっと責任を果たすべきと主張している。低所得国および中間所得国では、高等教育の質を高め研究と技術の種類を広げることで、人々の経済的状況を改善できる。10月13日出版の報告書"Putting Higher Education to Work: Skills and Research for Growth in East Asia"はそう述べる。

「タイにも当てはまります。ここ数十年で急速に発展しましたが、所得上昇や生産性の向上など課題は多い」世界銀行のタイ担当者 Annette Dixon は言う。

報告書は、東アジア途上国の高等教育が十分な技術のある学生を排出できてはいないと指摘している。製造業でもサービス業でも、雇用する側としては、自己解決でき、コミュニケーション能力に富み、マネジメント力もある人間を求めている。また、産業界における大学の研究面での貢献についても不十分であると指摘する。大学は長きにわたって「孤高の」存在であった、と。

その上で、報告書は政府や政策策定者の役割であるとして以下の主張をしている。つまり、個々の大学が社会や企業、他の研究機関、初等中等教育機関との連携をすること。研究に予算やインセンティブをつけ、科学技術を優先し、貧しい学生や障害者には奨学金を用意すること。さらに、カリキュラム作成や人事面、予算面でのより一層の自治権の拡大を、説明責任とあわせて大学側に付与することを奨励している。

(Nationa 紙、10月14日)

■ 47の学生プロジェクトに補助金

タイ南部にて、学生の研究プロジェクトに予

算が付けられた。240の課題のうち47件がヤングサイエンスコンペティション 2012 (YSC) において選ばれた次第だ。

Walailak 大学と国立電気コンピューター技術センターでは、YSC での勝利を目指して、各学生に 3,000 バーツを支援したという。47課題のうち、工学 4 件、環境科学 15 件、数学 2 件、化学 11 件、植物学 11 件、残す 4 件がゴムに関するものであった。

YSC は 14 回目の開催で、優勝者はアメリカで開催される Intel International Science and Engineering Fair のタイ代表に選ばれることになる。

(Nation 紙、10月31日)

■ カセサート大学、植物育種に 2,000 万バーツ

12月16日、カセサート大学 (KU) カンペンセン・キャンパスの農学部 Peerasak Srinives 教授は植物燃料の原料となるヤトロファの栽培方法について、2,000 万バーツの補助金を受けることになった。タイ科学技術開発庁主任教授補助金 (NSTDA's Chair Professor grant) による "Breeding to Accelerate Domestication of Novel Jatropha for Fuel and Feeds" で、ヤトロファを 5 年のうちに持続可能なエネルギー源とする課題である。

Peerasak 教授は Chair Professor grant を受ける 2 人目の研究者で、最初はカセサート大学の化学部 Jumras Limtrakul 教授であった。Jumras 教授も 2009 年に 2,000 万バーツを受け取り、"Application of Molecular Nanotechnology to Industrially Important Nanostructured and Nanoporous Materials." に取り組んだ。

(Nation 紙、12月17日)

■ タイ教育力の強化—通商省の主張

グローバル化や国際化の波中で、タイでは包括的な教育ハブになるのではなく、特定分野に絞った国際教育（Transnational Education）に踏み出そうという議論が行われている。

通商省貿易局、高等教育委員会、職業教育委員会および大学との会議がもたれており、医療・看護・旅行・サービス業・食糧・農業分野において、教育省が国際的な教育ハブを目指すべきという点で合意した。12月26日にも教育大臣 Woravat Auapinyakul に意見書を提出するという。

今もこれまでもタイの大学は国際コースを開いてきたが、いわば流行に乗った2流の国際コースであり自己満足であった。今後は、地域医療などタイでしか学べないコースを開設しなくてはならない。また、中国がそうしているように、東南アジア域内でタイ語教育・普及を行うことでタイの影響力を増すべきであると、Dhurakij Pundit 大学副学長 Prof Paitoon Sinlarat は言う。

会議資料によれば、現在ヴェトナムをはじめとしたASEAN各国ではタイ語学習者が増加しているという。

通商省貿易局 Ronnarong Poonpipat はタイが以下の4つの国際教育を実施するべきと主張する。①遠隔・オンライン教育、②留学生を呼び込む国際教育、③外国大学のタイ・キャンパス開設を呼びこむ国際教育。④国際出張授業。

3年後に控えるアセアン経済共同体（Asean Economic Community）に向けてしっかり備えておかななくては、タイが単に域内他国にとっての新市場になってしまうという危機感は強い。

教育委員会事務局長 Anek Permvongseni に

よれば、国内で国際教育（Transnational Education）に関する会議を開く予定だという。また、アセアン域内から各国の経験を持ち寄る国際シンポジウムも開催の予定である。特にシンガポールとマレーシアの経験から学ぶ目的だという。

（Nation 紙、12月20日）

10月

- 11 日 (火) チェンマイ出張 (～13 日)
チェンマイ大学を表敬訪問
- 12 日 (水) USMCA に参加、ポスター発表
- 15 日 (土) JSPS-NRCT セミナー開催
- 17 日 (月) 大分大学より山岡教授 来訪
- 18 日 (火) 理研シンガポール事務所より柿原所長 来訪
〃 JICA タイ事務所 米原所長を表敬訪問
- 19 日 (水) 京都大学東南アジア研究所主催夕食会に参加
- 26 日 (水) 洪水避難のため副センター長一時帰国 (～11 月 6 日)
センター長は日本へ出張中
- 27 日 (木) JSPS 本部へ安西理事長を表敬訪問

11月

- 8 日 (火) コンケン出張 (～9 日)
コンケン大学にて事業説明会を実施
- 9 日 (水) コンケン大学人文社会学部にて事業紹介を実施
- 14 日 (月) バングラデシュ出張 (～16 日)
在バングラデシュ日本大使館を訪問、打合せ
JSPS バングラデシュ同窓会幹部との打合せ
バングラデシュ国立博物館等視察
- 30 日 (水) ミャンマー出張 (～12 月 3 日)

12月

- 1 日 (木) ICSE2011 に参加 (～2 日)
- 3 日 (日) ヤンゴン工科大学を視察
シンガポール出張 (センター長先発)
- 5 日 (月) APRSAF18 にて JSPS のアナウンス
JST シンガポール訪問
理研シンガポール事務所訪問
- 13 日 (火) JASSO 本部より金城課長来訪
- 14 日 (水) Hat Yai 出張 (～15 日)
- 16 日 (金) プリンス・オブ・ソンクラ大学表敬訪問
- 16 日 (金) NRCT 表敬訪問
- 22 日 (木) JASSO タイ事務所にて打合せ
- 23 日 (金) 仕事納め



カイさんのタイご案内



Chinese New Year 2012 (タイの中国旧正月)

先週末、タイは中国正月の準備で大忙しでした。

1月21日(土)

「買い物日(Buying Day)」として知られていて、1月23日の元旦に向けてプレゼントや飾り付けや果物を買います。どの家でも掃除をすることが習わしで、これは去年の災厄を追い払い、幸運を迎え入れるために行います。窓やドアには、幸運や幸福・豊かさ・長寿(福祿寿)を意味する赤い紙で飾り付けをします。

1月22日(日)

「祈りの日(Worshipping Day)」です。先祖供養と天の神への祈りとして、豚、鴨、鶏、たけのこ、甘いものからなる食べ物を用意します。食べ物にはそれぞれ象徴する意味があります。

豚: 豊かさ

鴨: 純粋さ、賢さ

鶏: 勤勉さ、繁栄

バナナ: 子孫繁栄

梨: 不老不朽

オレンジ: 招福

りんご: 平和

ぶどう: 家内安全

たけのこ: 豊かさ

ニラ: 長寿

レタス: 繁栄

おもち: 完全なる甘さ

もち米のバナナの皮蒸し: 幸福

カップケーキ: 繁栄



この日、家族は集まって夕食を一緒にとり、Angpao と呼ばれる赤い封筒にお金を入れて子供や従業員にあげます。また、爆竹の音には、悪霊や災厄を追い払う力があると信じられています。

1月23日(月)

「外出の日(Going out Day)」です。Angpao をもらった子供や従業員が遊びに行くのです。この日は誰もいいことしかしたり言ったりしてはいけません。このお祭りの間、中国系のタイ人は特別の赤い服を着ます。幸運を運んでくると信じられているからです。また、この間は家の掃除をしません。幸運や天の恵みを追い出してしまうように。

翻訳: 副センター長

なお、タイには4月にもタイの旧正月(ソンクラン)があり、町中で水をかけあって盛り上がります。

Map of JSPS Bangkok office

Please show this document to a taxi driver

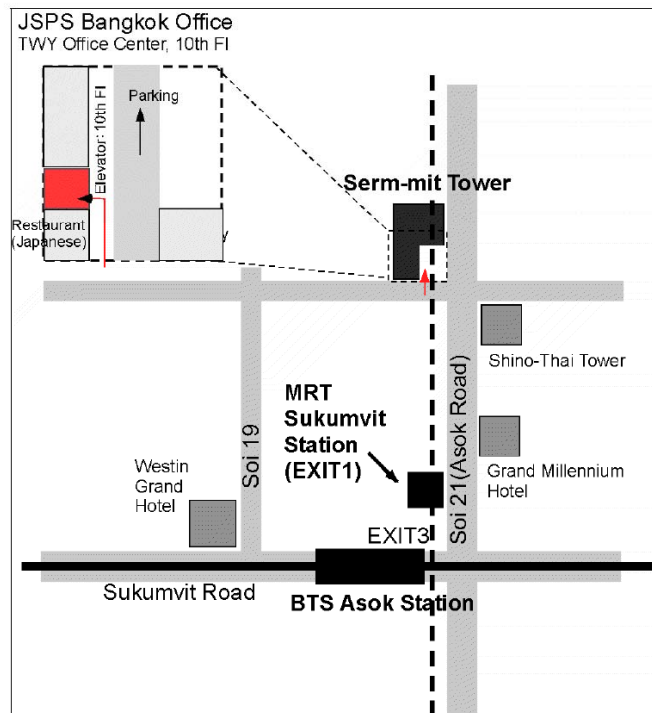
In English:

Please go to JSPS Bangkok office
Serm-Mit Tower at Sukhumvit Soi 21 (Asok)

In Thai:

เดินทางมาที่ เจเอสพีเอส สำนักงานกรุงเทพ

มาส่งที่อาคารเสริมมิตร ซอยสุขุมวิท 21 (อโศก)



Bangkok office

Japan Society for the Promotion of Science (JSPS)

113 TWY office center, 10F, Serm-mit Tower

159 Sukhumvit Soi 21, Bangkok 10110 Thailand

Tel: 02-661-6453

日本学術振興会バンコク研究連絡センター / JSPS Bangkok Office

113 TWY Office Center、10th Fl. Serm-mit Tower

159 Sukumvit Soi 21、Bangkok 10110

Tel: +66-2-661-6453 Fax: +66-2-661-6454